A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

44

ヘミングウェイ

武器よさらば　大橋健三郎訳
老人と海　福田恆存訳
短篇6篇

中央公論社

世界の文学　44　　©1964

ヘミングウェイ

訳者　大橋健三郎
福田恆存
谷口陸男
滝川元男
西川正身

THE OLD MAN AND THE SEA
by Ernest Hemingway
Copyright 1952 in U. S. A. by Ernest Hemingway, Japanese language anthology rights arranged with Alfred Rice, New York, and Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo.

昭和39年4月12日初版発行
昭和44年3月20日24版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

武器よさらば　3
老人と海　301
短篇
フランシス・マコーマーの短い幸福な人生　375
キリマンジャロの雪　410
清潔な照明のよいところ　439
敗れざる男　444
殺し屋　476
白象に似た山なみ　489

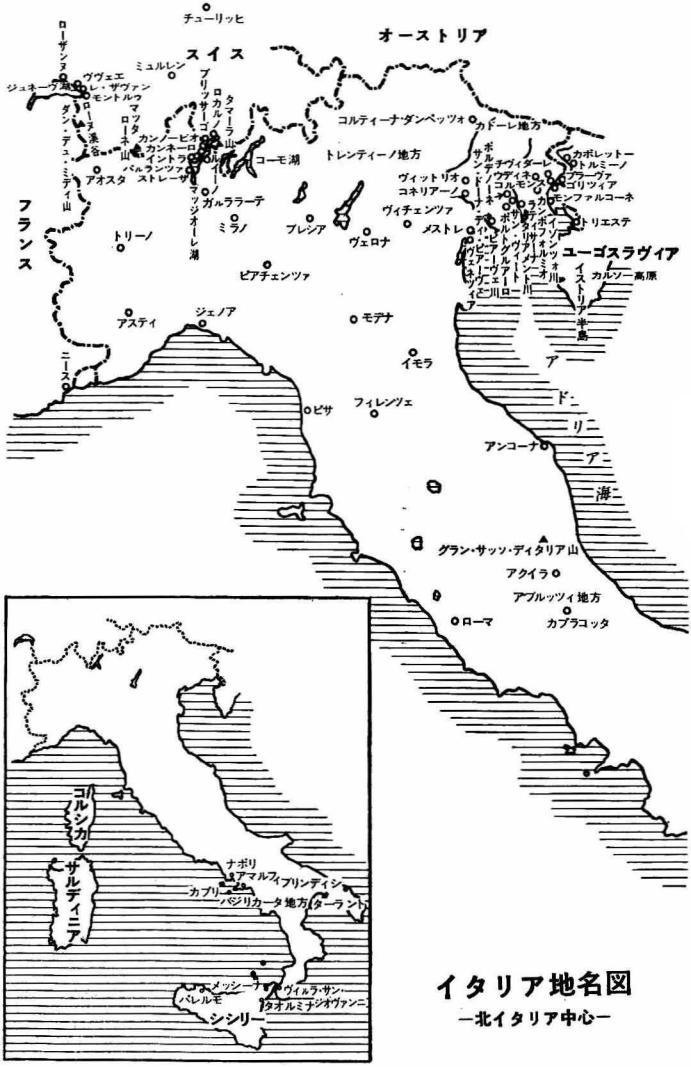
年　解
譜　説

515　496

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

武器よさらば

G・A・ブファイファーに


オーストリア
スイス
チューリッヒ
ローザンヌ湖
ジュネーヴ湖
ヴヴェエ
レ・ザヴァン
モントルー
ローヌ谷
ダン・デュ・ミディ山
アオスタ
ミュルレン
ブリッサーゴ
ロッカルノ
タマーラ山
カンネーロ
カンノーロ
イントラ
ストレーザ
バルランツァ
マッジオーレ湖
ガルララーテ
ミラノ
コーモ湖
トレンティーノ地方
コルティーナ・ダンペッツォ
カドーレ地方
ボルツァーノ
トレント
ヴィチェンツァ
ヴィットリオ
コネリアーノ
ヴェローナ
メストレ
ヴェネツィア
ポルデノーネ
ウディネ
チヴィダーレ
コルモンス
カポレットー
トルミーノ
グラーヴァ
ゴリツィア
モンファルコーネ
ラッテンバイー
ボイーゾ
ボルツァーノ
ボルツァーノ
ボルツァーノ

第一部

第一章

その年の夏の終わりごろ、ぼくらは、川と平野の向こうに山々が見える、ある村の家で暮らしていた。川床の小石や丸石は太陽に乾いて白く、幾筋かにわかれた水路の水は澄んで流れが早く、青く眼にしみた。部隊が家のそばの道路を行進してゆき、彼らのまきあげる土埃りが木の葉に白く粉をふりかける。木の幹もまた埃りにまみれ、その年は落葉は早く、ぼくらは部隊が道路を行進してゆくのをながめた。土埃りはまきあがり、枯れ葉は微風にゆられて落ち、兵士たちが行進してゆくと、そのあとの道路は白っぽく、落ち葉のほかには物影ひとつなかった。

平野には作物が豊かに作りつけられ、果樹園も多かったが、平野の向こうの山々は茶っけて裸だった。その山のなかでは戦闘が行なわれていて、夜には砲列から閃光がひらめくのが見えた。暗やみのなかでは、それは夏の稲妻のようだったが、夜はいつも涼しく、嵐がやってくるような気配はなかった。

ときどき、窓の下の暗やみのなかを部隊が行進してゆき、大砲が牽引車にひかれて通りすぎてゆく物音を、ぼくらは聞いた。夜には往来ははげしく、道路という道路には、荷鞍の両側に弾薬箱を積みこんだたくさんのらばや、兵士たちをのせた灰色のトラックや、積み荷にキャンバスをかけて往来のなかをおくれがちにゆっくりと進んでゆくほかのトラックがひしめいた。昼間に牽引車に引かれて通りすぎてゆく巨砲もあった、長い砲身は緑の枝におおわれ、牽引車にも緑の葉の茂った枝やつるがかぶせてある。北のほう、渓谷のかなたを見わたすと、栗の木林が見え、そのうしろには、川のこちら側にあるもうひとつの山が見えた。その山を攻略しようとする戦闘もつづけられていたが、それは成功をおさめず、秋になって雨期がやってきたときには、栗の葉はすっかり落ちて枝は裸になり、木の幹は雨に濡れて黒かった。ぶどう畑も緑はうすく、裸の枝もあらわに、あたりは見わたすかぎり秋雨に濡れて褐色をおび、死んだように生気がない。川の面には霧が、山には雲がたれこめて、トラックは路上に泥をはねあげ、兵士たちのマントは泥にまみ

れて濡れていた。かついだ小銃も雨に濡れ、マントの下には、革の弾薬盒が二つ、ベルトの腹部についていたが、挿弾子にはめこまれた、細くて長い六・五ミリの小銃弾がぎっしりとつまって重いその灰色の革の薬盒は、マントのまえをふくらませ、道路を行進して通りすぎてゆく兵士たちの姿は、まるで妊娠六ヵ月の妊婦のように見えた。

猛烈な速力で走りすぎてゆく小さな灰色の自動車が何台かあったが、それにはたいてい運転手の隣りに将校が一人、後部の座席に数人の将校が乗っていた。そういった車は軍用トラックよりも猛烈に泥をはねとばしたが、もし後部の席の将校の一人がたいへん小柄な人物で、二人の将軍にはさまれてすわり、その人物のからだがあまりに小さいために、顔は見えずに帽子のてっぺんと細い背なかだけが見え、しかもその車がとくに早いスピードで走ってゆく場合には、それはおそらく国王だった。国王はウディネ（地図参照。地名に関しては以下同じ）に屯してほとんど毎日この方面の戦況の視察にやってきたのだが、戦況はしごく悪かった。

冬の訪れとともに長雨がはじまり、雨とともにコレラが襲った。しかし、コレラは防がれ、けっきょく全軍でただ七千人がそのために死んだにすぎなかった。

第二章

翌年はあちこちで勝利があった。渓谷の向こうの山と栗林のある丘の中腹は占領され、南のほう平野のかなたの台地でも勝利はおさめられて、八月にはぼくらは川を渡ってゴリツィアのある家に移り住んだ。ここは、へいにかこまれた庭園のなかに泉水があって、濃い木蔭を作る葉の生い茂った樹木がたくさん植えつけられ、家の横壁には藤づるが捲きついて紫の花を咲かせていた。ここまでくると、もう戦闘は向こうの隣りの連山で行なわれていて、戦場まで一マイルと離れていない。町はとてもすばらしく、ぼくらの家もなかなかすてきだった。家のうしろには川が流れ、町もしごく手ぎわよく占領されていた、もっとも、向こうの山々を占領することはまだできないでいたが、ぼくは、万一戦争が終結した場合、いずれこの町に帰ってくるというのがオーストリア軍の思惑であるらしいのを知ってたいへん喜んだ、彼らは町を砲撃してもけっして破壊することはなく、ただちょっと戦略的にそうするだけだったからだ。人々は町の暮らしをつづけ、わき通りには病院やキャッフェや砲兵陣地があり、また兵隊用と将校用の慰安所がそれぞれ一軒ずつ

あった。そして夏の終わりとともに涼しい夜々がやってきた。町の向こうの山のなかではまだ戦闘がつづけられ、鉄橋には砲弾の炸裂した跡が残り、戦闘のあった川のそばのトンネルはつぶれていたが、広場のまわりには木々がそびえたち、広場に通じる大通りにも並木が遠くまで立ちならんでいた。そればかりではなく、町には娘たちの姿も見え、国王は車で町を通りすぎてゆく。いまではときどき、彼の顔や、細長い首をしたからだや、山羊のあごひげのようなその灰色のあごひげが見えることもあった。そして、そんなうちにも、突然砲弾に壁がくだけさった家の内部が赤裸々に見え、庭や、ときには街路に、しっくいや荒石がくだけちっていたが、こうしたいっさいのことや、カルソー地方（アドリア海北岸のユーゴスラヴィアの地域）では戦況はすべて有利に展開しているということが、今年の秋を、ぼくらが田舎にいた去年の秋とはたいへんちがったものにしていた。戦争もまた変わっていたのだ。

町の向こうの山のかしの林はなくなっていた。ぼくらが町にやってきた夏には林は緑だったが、いまでは切り株や、折れた木の幹や、えぐりとられた地面が見えるばかりだ。そして秋の終わりのある日、かしの木の生えていたあたりにいってみると、山の向こうから雲がやってくるのが見えた。それはみるみるおしよせてきて、太陽が鈍い黄いろみを帯びたかと思うと、やがてあたり一面は灰色になって、空はおおわれ、雲が山をつたって降りてきたかとみるまに、突然もうぼくらは雲のなかにいて、雪が降っていた。雪は風に吹かれて斜めに降り、切り株のつきでた裸の土をおおった。大砲にも雪はつもり、塹壕のうしろの便所に通う雪の道ができあがった。

あとで下の町に降りてから、ぼくは慰安所の窓から外をながめて、雪が降るのを見つめた。それは将校用の慰安所で、ぼくは一人の仲間とグラスを手にもってすわり、アスティぶどう酒（イタリア北西部アスティ地方に産するぶどう酒）を飲んでいたが、ゆっくりと濃密に降りしきる雪をながめながら、ぼくらはその年の戦闘はもうすっかり終わったことを知った。川の上流の山々はまだ占領されていないし、川の向こうの山もどれひとつとして占領されていない。それらはみんなもう来年まわしなのだ。仲間は、ぼくらのメス（会食グループ）の牧師が、通りのぬかるみのなかを用心深く歩きながら通りすぎてゆくのを見つけて、彼の注意をひごうと窓をたたいた。牧師は顔をあげた。ぼくらを見ると、ほほえんだ。仲間ははいってくるように合図した。牧師は首をふって歩きつづけた。その晩、スパゲッティがすんだあとのメスの席でのこと——みんなはスパゲッティをフォークですくって、たれさがっているそのすそが離れる

までもちあげてからその手を下げて口へもっていったり、そうでなければ、たえずもちあげながら口のなかに吸いこんだりして、たいへんすばやく、真剣な顔つきで食べては、草で包んだガロンびんから勝手にぶどう酒を飲んだ、びんは金属製の小さなかごにはいってゆれていて、人さし指でびんの口をひきさげると、同じ手にもっているグラスのなかに、赤く澄んだ、タンニンのにおいのする美しいぶどう酒が流れこむのだったが――このコースの終わったあとで、大尉が牧師をいじめはじめた。

牧師は若くてすぐに顔を赤らめるたちで、ぼくらと同じように軍服を着ていたが、灰色の上衣の左胸のポケットの上に、暗赤色のビロードの十字架を縫いつけていた。大尉は、ぼくのためにといういかがわしい口実をつけて、片言のイタリア語で話した、つまり、ぼくに完全に理解ができ、なにも聞きおとすことがないようにというわけだったのだが。

「牧師さん、今日女の子といっしょ」大尉は、牧師とぼくの顔を見ながらいった。牧師はほほえんで顔を赤らめると、首をふった。この大尉はよく彼をいじめるのだ。

「ちがう?」と、大尉がききかえす。「今日、私、牧師さん、女の子たちといっしょにいるの、見た」

「ちがいます」牧師はいった。ほかの将校たちはそのひやかしを興がっていた。

「牧師さん、女の子といっしょじゃなかった」大尉はつづける。「牧師さん、女の子といっしょにいることめったにないね」と、彼はぼくに説明した。彼はぼくのグラスをとってぶどう酒をついだ。そうするあいだぼくの眼を見つめているのだったが、それでも牧師から眼をはなさない。

「牧師さん、毎晩、一対五ね」食卓についているものがどっと笑った。「わかりますか? 牧師さん、毎晩、一対五」彼はある身ぶりをしてみせて大声で笑った。牧師はそれを冗談として受けいれていた。

「法王はオーストリア軍がこの戦争に勝つことを望んでるんだよ」と、少佐がいった。「あの男は、フランツ・ヨゼフ(一八三〇―一九一六。時のオーストリア皇帝)が好きなんだ。あすこから金が出てるんだからな。私は無神論者だ」

「きみは『黒衣の豚』を読んだことがあるかい?」と、中尉がきく。「一冊もってきてやるぜ。おれが信仰をゆさぶられてしまったのはあれのおかげさ」

「あれはけがらわしい、邪悪な書物です」と、牧師がいった。「あんなものをあなたがほんとうにお好きなはずはありません」

「じつに貴重な本だよ」中尉がいう。「ああいう牧師連

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

中のことが書いてあるからね。きっときみも好きになるよ」と、彼はぼくに向かっていった。ぼくが牧師のほうにほほえみかけると、牧師はろうそくの火の向こうから微笑をかえした。「そんなものを読んではいけません」そう、彼はいった。

「ぼくがもってきてやるよ」と、中尉。

「ものを考える人間はみんな無神論者だ」と、少佐がいった。「かといって、私はフリー・メイソン（友愛を目的とし、理想社会の実現をめざして、世界平和と人類愛を高唱する世界的な結社）は信じないがね」

「自分はフリー・メイソンを信じますよ」中尉がいう。

「あれは高貴な団体ですよ」だれかがはいってきてドアがあいたとき、雪が降っているのが見えた。

「雪が降りはじめたからには、もう攻撃はありませんね」と、ぼくはいった。

「それァ、ない」少佐がいった。「きみは賜暇をとるべきだな。ローマへゆくべきだよ、ナポリへ、シシリーへ——」

「アマルフィを訪ねるべきだよ」中尉がいう。「アマルフィのおれの家族へ紹介状を書いてやるよ。息子みたいにかわいがってくれるぜ」

「パレルモへゆくべきだ」

「カプリへいかなくちゃな」

「アブルッツィを見て、カプラコッタの私の家族を訪ねていただきたいですね」と、牧師がいった。

「そらまた例のアブルッツィの話が始まったぞ。あすこはここよりも雪が深いんだぜ。この男は百姓なんかに会いたかァないのさ。文化と文明の中心へいかせてやらなくちゃァ」

「すてきな女の子を手にいれなくちゃいかんさ。ナポリのいろんなところの所番地を教えてやるぜ。美しい、若い娘たちだぞ——母親同伴のな。ハ！　ハ！　ハ！」大尉は片手をひろげて、影絵を作るときのように、親指を上にして、ほかの指を広くひろげてみせた。その手の影が壁にうつった。彼はまたもや片言のイタリア語でしゃべりはじめた。「きみはこういうふうにして出かけてゆく」彼は親指を指さした。「そしてこんなふうになってもどってくる」彼は小指にさわる。みんなが笑った。

「いいかね」と、大尉。彼はもう一度手をひろげた。ふたたびろうそくの火が壁にその影を作った。彼はまっすぐに立てた親指からはじめて、親指と四本の指を順序に名づけていった、「少尉（親指）、中尉（人さし指）、大尉（なか指）、少佐（くすり指）、それから中佐（小指）。きみは少尉として出かけてゆく！　中佐になってもどってくる！」みんなどっと笑った。大尉の指のゲ

ームは大成功をおさめていた。彼は牧師を見て、わめいた、「毎晩、牧師さん、一対五ね！」みんながまたどっと笑った。
「きみはすぐ賜暇をとらなくちゃいかんよ」少佐がいった。
「おれもいっしょにいって、案内してやりたいところだぜ」と、中尉がいう。
「帰ってくるときには、蓄音機を一台もってきてくれ」
「いいオペラのレコードをもってきてくれよ」
「カルーソ（エンリーコ・カルーソ＝一八七三―一九二一。イタリアのテナーのオペラ歌手）を頼むぜ」
「カルーソはまっぴらだよ。やつはわめくからな」
「やつみたいにわめくことができたらいいと思ってるんじゃないのかい？」
「いいや、やつはわめくさ。わめくといったらわめくさ！」
「私はアブルッツィへいっていただきたいのです」と、牧師がいった。ほかのものたちは大声でどなっていた。
「なかなかいい猟ができますよ。土地のものもお好きになれるでしょうし、それに、寒いけれど、空気は澄みきって乾燥しています。私のうちに泊まっていただいてもけっこうです。父は名うての猟師でしてね」
「さあ、いこうぜ」と、大尉がいった。「看板にならないうちに女郎買いにいこうぜ」
「おやすみなさい」ぼくは牧師にいった。
「おやすみなさい」彼はいった。

第三章

ぼくが前線にもどってきたときも、ぼくらの仲間はまだその町で暮らしていた。郊外の山野にはまえよりもたくさんの大砲がすえられ、春が訪れていた。畑地は緑、ぶどうの木には小さな緑の芽が吹きだし、道路にそった並木にも小さな葉がついて、そよ風が海から吹いている。ぼくは丘のあるその町をながめ、その向こう、丘にかこまれた盃形のくぼみ高くに、かなたの山々を背にして立っている古城を見た。山は茶色で、斜面に少しばかり緑がまじっている。町にはいると、まえよりもたくさんの大砲が眼につき、新しい病院もいくつか建てられていて、街通りではイギリス兵や、ときにはイギリス婦人の姿を見かけた。新しく砲火にやられた家も何軒かあった。あたたかく春めいていて、へいにさす陽ざしにあたたまりながら並木のある裏通りを歩いていってみると、仲間たちはまだ同じ家に住み、なにもかもがぼくの出ていったときとそっくり同じだった。ドアはあいていて、外の日

なたのベンチには兵隊が一人すわり、わきのドアのそばには傷病兵運搬車が一台待ちうけていて、ドアのなかにはいってゆくと、大理石の床と病院のにおいがした。もう春になっているということのほかは、ぼくが出ていったときとすっかり同じだ。大部屋のドアをのぞきこむと、少佐がデスクにすわり、窓があいて日光が部屋にさしこんでいるのが見えた。彼はぼくには気がつかなかったので、ぼくはなかにはいって報告すべきか、それともまず二階にあがって身じまいを正すべきかに迷った。ぼくは二階にあがってゆくことに決めた。

リナルディ中尉と共同で使っている部屋は中庭を向いていた。窓はあいていて、ぼくのベッドは毛布をきちんとたたんで整えられ、持ちものは壁にかかっている。長方形の錫の箱にはいったガス・マスクと鉄かぶとが同じ釘にかかっている。ベッドの裾のほうにはぼくの平たいトランクがおかれ、油のために革のびかびか光った冬靴がそのトランクの上にのっかっていた。青く焼きをいれた八角形の銃身と、ほおにぴたりとあう美しい暗色を見せているくるみ材の狙撃兵用銃床のついた、ぼくのオーストリア製の狙撃銃は二つのベッドの上にかかっている。それにとりつける照準望遠鏡はトランクにしまって鍵をかけておいたのを、ぼくは思いだした。中尉のリナルディはもうひとつのベッドで眠っていた。部屋のなかでぼくがたてる物音を聞きつけると、彼は目をさまして起きあがった。

「やあ！」彼はいった。「どうだったい、賜暇は？」

「すばらしかった」

握手を交わすと、彼はぼくの首をだいて接吻した。

「うう」ぼくはいった。

「きみは汚ないな」と、彼。「洗ってこなくちゃいかんぞ。どこへいってなにをしてきたんだ？　なにもかも、いますぐ聞かせてくれ」

「あらゆるところへ出かけていったさ。ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴィルラ・サン・ジオヴァンニ、メッシーナ、タオルミナ――」

「まるで汽車の時間表みたいな口をきくぜ。べっぴんとの冒険はなにかやってのけたかい？」

「うん」

「どこで？」

「ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ――」

「もうたくさんだ。ほんとはどこがいちばんよかったか聞かせてくれ」

「ミラノだな」

「それァ、そこがはじめての場所だったからさ。その女

にゃどこで会ったんだい？　コーヴァ（ミラノにあるキャッフェの名）でかい？　どこへしけこんだんだ？　どんな気分だった？　なにもかも、いますぐ聞かせてくれ。一晩泊まったのか？」
「うん」
「そんなのなんでもないさ。いまはここにだって、べっぴんがいるんだぜ。一度も前線にきたことのないほやほやの女たちが」
「すてきだな」
「ぼくを信じないのかい？　今日の午後二人で見に出かけるさ。それに、町にゃァべっぴんのイギリス娘もいるんだぜ。おれは目下ミス・バークリィと恋愛中さ。きみもいっしょに連れてってやるぜ。おれはたぶんミス・バークリィと結婚することになるだろう」
「顔を洗って報告してこなくちゃならん。いまはだれも仕事をしていないのかい？」
「きみがいってからは、仕事といやァ、しもやけとかあかぎれとか、黄疸、淋病、自家製の負傷、肺炎、それに硬性および軟性下疳といったしろものばかりだ。毎週だれかが石っころでけがをしやがる。ほんとうの負傷兵は二、三人ぐらいのもんさ。来週はまた戦争が始まるぜ。いや、たぶん始まるだろうということさ。そういうわさだからな。きみはおれがミス・バークリィと結婚するのがいいと思うかい――もちろん、戦争がすんでからの話だが」
「断然いいな」と、ぼくはいって、洗面器にいっぱい水を満たした。
「今夜はなにもかも聞かせるんだぜ」リナルディがいった。「ところで、おれは、みずみずしい、美しい姿でミス・バークリィに会えるように、もう一度眠っておかなくちゃならんて」
　ぼくは上衣とシャツをぬいで、洗面器にくんだ冷たい水でからだを洗った。タオルでこすりながら、部屋を見まわし、窓の外をながめ、それから、眼を閉じてベッドに横たわっているリナルディを見やった。なかなかの男まえで、ぼくと同年、アマルフィの出身だ。この男は軍医であることを愛していて、ぼくらは大の仲よしなのだ。見つめていると、彼は眼をあけた。
「金をいくらかもってるかい？」
「うん」
「五十リラ貸してくれ」
　ぼくは手を拭いて、壁にかかっている上衣の内ポケットから紙いれをとりだした。リナルディは、ベッドから起きあがりもしないで札を受けとってそれをたたむと、

ズボンのポケットにすべりこませた。微笑を浮かべて、「ミス・バークリィに、たっぷり金のある男のような印象をあたえなくちゃならんからな。きみはまさに、わが偉大かつ善良なる友にして、財政上の保護者というべきだよ」

「くそくらえ」ぼくはいった。

その晩メスの席で、ぼくは牧師のとなりにすわったが、彼は、ぼくがアブルッツィへいかなかったことに失望し、にわかに心を傷つけられたらしかった。ぼくが出かけてゆくことを父親に手紙で知らせ、家族のものたちが用意をととのえていたのだ。ぼく自身も彼と同じようにあと味が悪く、どうして出かけなかったのかわれながら解せない気持だった。ほんとうはそうしたかったのだ。ぼくは、次から次へと悪条件が重なっていった事情を説明しようとこころみたが、最後には彼もわかってくれて、ぼくがほんとうにいきたがっていたことを理解してくれ、それで気持もほとんどやわらぎかけた。ぼくは、ぶどう酒をうんと飲み、そのあとでコーヒーとストレーガ（甘味と香料をまぜたオレンジ色のリキュールの商標名）を飲んでいたので、ほろ酔い機嫌で、人間というものはしたいと思っていることをしないものだ、そういうことはけっしてしないものだ、などと述べたてたものだった。

ぼくたち二人は、ほかのものたちが議論をしあっているあいだ話していた。ぼくはアブルッツィへいきたかったのだ。だが、ぼくは、道路が凍てついて鉄のようにかたくなり、空気が澄みきって冷たく乾燥していて、雪もかわいて粉のようになり、雪のなかには野うさぎの足跡が見え、百姓たちが帽子をぬいでだんなさまと呼びかけ、狩猟もたっぷりと楽しめるようなところへはどこへもいかなかった。そういうところへはいかずに、煙草の煙のもうもうとたちこめるキャッフェへぼくは出かけていった、部屋がぐるぐるとまわりだし、そのまわるのを止めるためにはじっと壁を見つめねばならないような夜をすごした、それからまた、酔っぱらって女といっしょにベッドにもぐりこみ、これこそが人生のすべてだと思い知った夜、そんなときには、眼をさましてはだれといっしょに寝ているのやらもわからずに、いよいよ異様な興奮をそそられ、暗やみのなかでは世界じゅうが非現実的なものに見えてくるのだったが、興奮のあまりに、夜のくらがりのなかで相手もわからず気にもかけないで、また同じことをくりかえすよりほかなく、これこそすべてだ、すべてだ、すべてだ、と確信しながら、気にもかけないのだ。かと思うと、突然ひどく気になりはじめて、眠りこんでは、朝ときどき気になって眼をさますのだったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb